自分が希望する地域での暮らし

～「サテライトという選択肢」完結編～

希望の丘はだの　地域生活支援課
安部　仁　　矢浦　将人

1.サテライトを設置に向けての準備

一昨年の体験交流セミナーにて「サテライトという選択肢」と題して、今後の地域生活の新たな展望を発表し、その後事業の開始が決まり動き始めた。前回の発表時、利用者にサテライト型ホームの事業説明とニーズの確認を行ったところ、希望する利用者が複数いたため、改めて機構の聞き取りを行った。事業開始にあたり、予算や申請等の理由で複数名の同時進行が難しいため、希望者のニーズ確認と各会議での検討を重ね、候補者を一名に絞った。

候補者は、以前より現状の生活より一人暮らしに近い生活の希望があがっている女性利用者で、令和２年の秋頃より、「精華園のアパートを出て一人暮らしをしてみたい。」との要望が聞かれており、当時はサテライト型ホームの事業が無かったので完全な一人暮らしとしての動きだったが、翌年よりサテライト型ホームの事業が開始されたことで内容の説明やニーズの確認を行ったところ、「一人暮らしはしたいけどすぐに行う自信はない。サテライト型のホームがあるのならやってみたい。」との意向であった。ホーム支援者や他利用者との距離感でも苦労していたこともあり、本人に合っているサービスであることを地域生活支援課内でも理解を得て、計画相談とも連携しサテライト型ホームへの移行に向けた取り組みを開始することとなる。

2. 希望する生活場所の確認と不動産屋への情報収集

(1)希望する生活場所の確認

事業説明やニーズの確認を行いながら進めていても、本人的には何もない所から新たな生活をイメージすることは容易ではなく、心配事の方が多く聞かれた。人との関係性をつくることが苦手な方であり、歴代のホーム担当も話ができるようになるまで時間を要していた。顔を合わせるたびにサテライト型ホームの話ばかりすると本人も疲れてしまうので、半年ほどは本人がリラックスできるよう趣味の YouTube や好きなアニメの会話を織り交ぜて話をした。その中でふとした拍子に「東海大学前駅の傍が良い」との話が聞けた。

(2)不動産屋への情報収集

本人の希望により、東海大学前駅周辺にある不動産屋から、空室情報の収集を開始した。以前、サテライト型ホーム開設の情報収集としてサテライト型ホームを運営している他法人と情報交換を行なった際、不動産屋の管理物件の方が借用しやすいとの話があったので、大手不動産業者と地元の不動産屋に福祉制度内の事業であることを利用者向けに作成した資料を持参して説明を行った。入居する利用者の経済状況と女性であることを踏まえ以下の条件を提示し、空室情報を収集した。

・家賃は、立地や築年数、希望の設備と負担できる金額のバランスに配慮した。
・住まいは、有事の際１階の方が玄関以外にも避難経路を確保できるが、外からの侵入や

洗濯物等の私物紛失のリスク軽減を優先し 2 階とした。
・バストイレについては、今と同様の生活環境であることと環境整備のしやすさを考慮して、別々になっていることを条件とした。
・洗濯機の保管場所についても、今と同様の生活環境であることを考慮し室内保管が出来ることを条件とした。
・ゴミ捨て場が遠方になることで持って行くことが面倒になることを懸念し、ゴミ捨て場が敷地内に設置してあることも条件とした。

3. 本人への意思確認と候補物件の検討

(1)本人への意思確認

収集した物件情報を本人が選択しやすいように掲示し、イメージを膨らませられるよう話を重ねた結果、玄関間口が広い方が良い、買い物がしやすい方が良いといった思いが固まってきた。同時に、人との関係作りが苦手なことで共有スペースに行きたくなくなったことからの脱却を図るため、本人の意向に沿って近隣のケアホームに夕食を取りに行く練習を開始した。練習で行くようになったホームでは、職員が介在しながらホーム支援者と関わる事で、少しずつ苦手意識に変化が見られてきた。更に、練習したホームの担当職員とも関わる機会を設けることで、困った際に連絡できる職員が二人となった。

また、サテライトの先を見据え、将来一人暮らしをすることになった際の財産管理等への不安が強い事もあり、安心センター(日常生活自立支援事業)や成年後見制度の利用を提案し、「嫌ならやめても良い」と前置きした上で成年後見制度の話を聞く機会を設けた。話を聞いた「NPO 法人総合福祉サポートセンターはだの」の職員が気に入った様で、「後見をお願いしたい」との気持ちになった。後見に関しては先方から「時間をかけてお互いに分かりあってから」と提案され、今後申請を行っていく予定。ここまで約 1 年が経過したが、最初にあった沢山の心配事が〝寂しくなるかも〟だけとなっていた。

(2)空室情報の精査

不動産屋への情報収集で、東海大学前駅周辺で 4 カ所、秦野市と隣接する平塚市真田で 3 カ所の合計 7 カ所の該当物件が候補として挙がった。複数の不動産屋と情報交換する中でサテライト型ホームの事業への理解には繋げることは出来たが、秦野精華園との契約は良いが個人での契約になった場合の家賃支払いや有事の際のバックアップはどこがするのかと言った懸念事項を心配する声も多く聞かれた。オーナー等に安心してもらうため、個人での契約となった際の懸念事項への対応策の提示も行った。不動産屋によっては制度説明の段階で断られることや、物件を紹介してもらったが後日オーナーに相談したところ近隣とのトラブルを心配され白紙になったケースもあった。一方でセーフティネット住宅情報共有システムに登録し、単身の高齢者や身体障がいの方の入居に繋げている実績のある福祉への理解度が高いオーナーもおり、福祉への姿勢の違いを感じ取ることがあった。7 カ所の候補物件を地域生活支援課の課会議で基点ホームの想定や生活の動線を踏まえ検討し、3 ヵ所に絞った。本来であれば本人に同行し本人が不動産屋に希望等を伝え物件を探していく流れだが、利便性を考慮し、事前に希望を募りそれに沿った形で職員が事前に物件探しを行い、収集した物件情報を選択しやすいように精査し、本人に情報提供した。

4. 候補物件の内覧

候補に挙がった 3 カ所の物件を、職員が同行して内覧した。ニーズに沿った候補だったこともあり、3 物件の内 2 物件を気に入ってしまい 1 つに絞ることが難したったが、各物件のメリットとデメリットを繰り返し確認し、時間はかかったが 1 つに絞ることができた。

物件については一般募集もしている住宅で、長時間押さえておける保障がないため、迅速な決断が必要だった。

5. 新たな生活の場所とした「決めて」

物件は東海大学前駅から徒歩 7 分、閑静な立地で基点ホームからは徒歩 10 分。
決め手となったのは、建物は新しくないがリフォームしており住み心地が良さげだったこと、物件からの景観の良さ、部屋が横並びではなく数部屋ごとに段になっている構造でベランダの両隣が挟まれる事がないため、「隣からみられる」という感じが少なかった等であった。更に、内覧時にアパートの前に家がある大家さんが親切に声を掛けて下さり、安心を感じることができた。また、「職員が来た時に駐車場があるから」と、こちらへの気遣いもしてくれていた。

6. 基点ホームの受け入れ準備

基点となるホームの支援者会議を臨時で開催し、記録のポイントの説明と支援方法について周知した。支援者会議には仕事を終えた本人も顔合わせにきて、緊張や恥ずかしさがありつつも挨拶や自己紹介が行なえていた。以前の本人であれば難しかったと思われるが、1 年以上かけて人との関係性をつくることへの苦手意識が和らいだこと、本人と関われるようになった複数の職員が介在したこともあり、和やかな時間となった。

7. 運営に関して

最終的に部屋が決まる前に、物件探しと並行して事業を開始するにあたり神奈川県福祉こどもみらい局福祉部障害サービス課の事業支援グループに事前相談として、所定の書類作成及び提出の手続きを行った。また、ホームの拠点とサテライトの設置予定地を管轄する秦野市障害福祉課への情報提供を行った。更に、消防署に出向きスプリンクラー等の消防設備の設置が必要かの確認を行った。生活の場所が確定した段階で、神奈川県障害サービス課の事業支援グループと秦野市建築指導課にバリアフリー条例についての書類作成と提出を行なった。福祉事業の枠組みのため、スプリンクラーの設置については基点ホームの基準に準ずるとあるが、実際には既存の一般アパートの 1 部屋であるため、設置は極めて難しく、バリアフリー条例に関しても玄関口は車いすが通れる幅があるか段差はないか等、細かく指導があった。また、書類提出＝事業開始ではないため、書類提出から申請が通るまで時間を要しアパートを契約して約 2 か月間は入居できずに本人に待ってもらうことになった。サテライトを追加した運用規定、重要事項説明書等の関係書類の記載事項の変更を行なった。課会議では、サテライトホームの追加に伴う記録の整備と支援方法の確認を行った。

8. サテライトホームでの生活

引越しに際し、荷造りや不用品の仕分けは全て自身で行なえており、元々持っている力の

高さに驚かされた。引越し当日は様々な職員が応援に入ったことで、自分を支える人は沢山いる**こと**を感じていた。慣れるまでの間は、基点ホームに食事を取りに行く際職員が同行し、ホーム支援者とも職員を介しながらも会話が出来ていた。夜間の安全確認も嫌がること無く応じている。念願であった Wi-Fi を設置し、動画視聴などして過ごすことが増えた。苦手だった支援者や他利用者との関わりが無くなったことでちょっと寂しいとの発言もあったが、担当以外の職員とも連絡が取りあえる**こと**が出来ており、困ったことの報告等こまめに連絡が来る様になってきている。

9. サテライトとは

入所施設やグループホームにおいては、空いている部屋があるから受け入れる形になっており、そこで利用者の生活圏が決まる。サテライト型ホームは本人が希望する「どこでどのように暮らす」「どのような支援が必要か」を具現化し、住む人の要望やイメージから作り挙げて行くことが主幹となる。一人暮らしへのステップアップだけでなく、その方にあった生活、支援を一緒に考えた結果それがサテライト型ホームであっただけ。そのため、私たち自身が、部屋が空いているといった理由だけで利用者の生活圏を決めてしまうと言った意識から抜け出さないといけないことを痛感した。

福祉サービスとしてありながらも、制度としての枠組みが利用者のニーズや実態に即していない面はいまだ山積しているが、それでもこの様な制度があることで利用者のニーズに応えられる幅が広がり地域生活の多様化にも繋がると思われる。

10. 意思決定支援を行う際の配慮や工夫

何もない所から住む場所をイメージして探すことの難しさはあった。利用者によっては、決めてもらった方が楽という方もいると思われる。地域生活と言うと仕事に通って身の周りのことは自分で行なうイメージもあるが、それもどこか職員が引いたレールを走らされているだけかもしれない。最終的には本人の能力の高さに助けられた部分も多く、導入から実施までのノウハウを積み上げていかなければと感じた。

今回、サテライトホームへの移行の動きを始めて、最初の半年以上は本人の気持ちを引き出すために関係性を上げないと本当の気持ちは聞き出せないと考え、職員にも極力こちらの意図を出さず本人に時間をかけて考えてもらうことから始めた。また、普通という表現を簡単には用いず言葉のみでなく視覚や見学など選択肢も数多く試した。

意思決定とは、本人に決めてもらうことの前段階の考えてもらうまでの準備が大変であることを実感した。